

[実践報告] 大学における地域の歴史遺産を活用した
NIE実践の開発

—ピースあいちとの連携を通して—

白井克尚

愛知東邦大学

[実践報告] 大学における地域の歴史遺産を活用した NIE実践の開発

ーピースあいちとの連携を通してー

白井克尚

目次

1. はじめに
2. 愛知東邦大学が位置する平和が丘の歴史的環境
3. 大学の教職課程におけるNIE教育の意義
4. ピースあいちと連携したNIE実践の開発
 - (1) ピースあいちと連携した教職科目「社会」の単元開発
 - (2) 本実践の目標と評価観点
5. 大学における地域の歴史遺産を活用したNIE実践の実際
 - (1) 「新聞作り」を学ぼう
 - (2) ピースあいちで取材活動を行おう
 - (3) 「平和新聞」を作ろう
6. おわりに

1. はじめに

戦後70年を迎え、国内外における若者の平和意識の問題がクローズアップされている。昨年起こった自由と民主主義のための学生活動であるSEALsの行動は、多くの大学生にとって、戦争や平和の意味を考え直す契機となった。しかし、また一方で、授業中の私語やスマホの使用など、自ら学ぼうとしない大学生が増えていることも事実である。そのような様々な背景をもつ大学生に、いかにして主体的な平和意識を育むことができるかといった問題は、大学教育に関わる者にとって喫緊の課題となっている。とりわけ、教職課程の中で社会科教員養成に関わる教員が大学生に平和意識を育むことは、将来の社会科教師たちが子どもたちに対して平和の問題について歴史を踏まえて語れるかといった理由からしても、重要な意義を認めることができる。

最近では、大学の教職課程の中の社会科教員養成の場面において、人権意識や社会的課題に向き合う態度を育もうとする試み¹や、社会科カリキュラム分析力や社会科授業分析力に焦点を当てて育成しようとする意欲的な取り組み²も報告されてきている。また、フィールドワークを活用し、地域と連携した独自性のある取り組み³も行われている。大学において社会科教員養成に関わる教師は、学生の平和意識の育成の問題に対し、教育実践を通して向き合っていかなければならないと考える。

筆者は、そのような課題に応えるために、次の三つの仮説を設定し、教職課程の中で学生の平和意識の育成をめざした授業実践に取り組んだ。一つは、地域の歴史遺産を活用する視点である。学生たちが、地域に残る歴史の具体物を目にすれば、関心をもちながら歴史について学ぶことができる考えた。二つ目は、体験活動を取り入れる視点である。学生たちが、野外調査や見学活動を通じて地域の歴史を身近に捉えることができれば、戦争や平和の問題についても主体的に考えることができる考えた。三つ目は、表現活動を生かす視点である。学生たちが、対話やグループ活動を通して自分なりの考えを表現できる場面を設定すれば、考えを広め深めていくことができる考えた。以上のような仮説に基づいて、2015年度前期、教職科目「社会」の授業の中において、学生たちとともに地域の平和の問題について考える授業プログラムの開発を行った。本稿では、その取り組みの一端を報告したい。

2. 愛知東邦大学が位置する平和が丘の歴史的環境



写真1 東邦高校敷地内に残る「平和の碑」

東邦学園敷地内（名東区平和が丘）には、「平和の碑」が建立されている。これは、太平洋戦争下における1944年12月13日に、三菱発動機大幸工場（現、三菱重工業名古屋発動機製作所）への空爆により、勤労働員中の東邦商業学校の引率教員・生徒、合わせて20人が犠牲となったことへの慰霊碑として建立されたものである⁴。大幸工場の建造物の一部をなしていたコンクリート塊が使われており、毎年12月13日前後には、この碑の前で「東邦学園慰霊の日」が開催され、戦後70年の節目を迎えた昨年の2015年12月3日にも、献花式が行われ、理事長より犠牲者への追悼の言葉が述べられた。

東邦学園の来歴において、このような「平和」への願いがあったことは、忘れてはならない歴史的事実であると考えられる。大学教育においても、以上のような願いを大学生に伝え、地域社会に



写真2 平和と戦争の資料館 ピースあいち

において市民とともに対話を重ねて交流・活動しながら積極的に平和を創造していくことができる市民的資質を育まねばならない。そのことは、今後の社会科教員としての重要な素質になるだろう。

また、本学の位置する名東区には、「戦争と平和の資料館 ピースあいち」という歴史系博物館が存在している。2007年5月に、愛知県下や名古屋市内に残る戦争資料を収集・

保存・展示するとともに、歴史の教訓として後世に伝え、次の世代の平和のために役立てる目的で開設された歴史系博物館である⁵。「戦争と平和の資料館 ピースあいち」は、「NPO平和のための戦争メモリアルセンター」が運営し、ボランティアが活動を支えており、学校教育との連携活動にも積極的に取り組んでいる。本学とも徒歩15分程度で距離的にも近く、地域における戦争と平和の問題を調査・研究するためには、うってつけの施設である。

本学の周辺地域には、これまで述べてきたような貴重な歴史遺産が存在している。最近では、小学校の現場において地域に残る近代の歴史遺産を活用した熱心な教育実践も報告されてきている⁶。しかし、地域における教員のフィールド・ワーク経験の不足といった原因から、実際の学校現場では、そうした教育機会を持つこと自体が少ないということも指摘されている⁷。そこで、本稿では、大学生の平和意識を育成するための実践を、NIE (Newspaper In Education)⁸という教育方法を用いて開発し、一つの事例として提示することにより、学校教育現場での活用資することとしたい。

3. 大学の教職課程におけるNIE教育の意義

これまでにNIE教育の意義については、主に次の三点において指摘されている⁹。一つ目は、「市民性の育成」という目標の実現に関する意義である。二つ目は、「情報読解力」を育成する学習材としての新聞活用の意義である。三つ目は、「学習の主体性」を保証する協同（協働）的な学習活動に関する意義である。そのような意義を踏まえ、最近では、小学校・中学校・高等学校・大学における様々なNIE実践の取り組みが報告されてきている¹⁰。

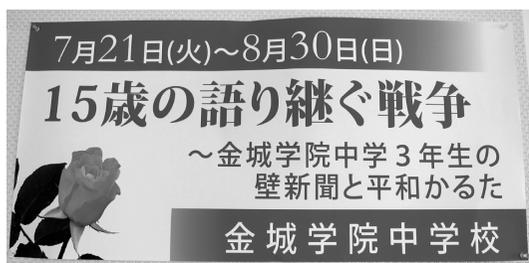


写真3 「15歳の語り継ぐ戦争」展と
金城学院中学生が作成した壁新聞

大学の教職課程におけるNIE教育活用として、筆者が着目したのは、「まとめ型新聞」¹¹づくりの教育方法である。「まとめ型新聞」づくりの活動は、学習者を情報を読み取る側だけでなく、発信する側にも立たせることもできる教育方法である。そのことは、平和の問題について多角的に考えることができる「市民性」の育成にもつながると考える。また、地域の歴史博物館と連携した表現活動を通じて、学習者が「主体的」に学習に取り組むことができるだろう。そして、新聞をつくる際には、これまでの自信の新聞の読み取り方を振り返らせることにより、「情報読解力」をも豊かに育むことができると考えた。

このような単元を構想する上で参考になった事例が、ピースあいちと連携した名古屋市

金城学院中学校の生徒たちによる「壁新聞づくり」の取り組みである。この取り組みは、修学旅行で広島へ行った中学3年生が、地域の方への聞き取り調査を行い、それをまとめたものをピースあいちの協力を得て、壁新聞として作成して掲示し、訪れた市民に平和の尊さを訴えるものである。地域に根ざした形で、中学生に平和意識を育む上でも貴重な取り組みであるといえる。

本実践では、そうした壁新聞づくりの取り組みを参考にしつつ、大学生を対象としてピースあいちの見学・調査活動を通して考えたことを、「まとめの新聞」として作成・掲示し、制作段階では交流を通して考えを深め合うことを考えた。将来、社会科教育に関わる大学生に対して、ピースあいちと連携を深めながら、平和意識の形成をねらい教職課程におけるNIE実践を展開することを考えた。

4. ピースあいちと連携したNIE実践の開発

(1) ピースあいちと連携した教職科目「社会」の単元開発

ピースあいちと連携したNIE実践は、教育学部2年生を対象とした教職科目「社会」において、3時間計画で、表1のように学習活動と学習内容を構想した。

第1時には、元毎日新聞の新聞記者である榊直樹先生（本学理事長・学長）をゲストスピーカーとしてお招きし、新聞の作られ方や新聞の読み取り方、新聞の作り方についてのお話を聞き、平和新聞の作り方について構想を固める時間として設定した。

第2時には、実際にピース愛知に見学に行き、新聞記事の資料となる記事を探す取材活動を行った。取材活動に際しては、調査・見学を通して考えた戦争や平和の問題を自分の言葉でまとめるよう指示した。

第3時には、取材を通して得た情報を「平和新聞」として作成する時間とした。その中でも、相互発表や交流の時間を設けることにより、戦争や平和の問題について考えたことを、どのようにして分かりやすくまとめるかというように、情報活用力やコミュニケーション力も同時に高めたいと考えた。

表1 教職科目「社会」におけるNIE実践の学習活動と学習内容

時間	学習活動	学習内容
第1時	「新聞作り」を学ぶ	<ul style="list-style-type: none"> 元新聞記者のゲストスピーカーを招き、新聞の作られ方や新聞の読み取り方、新聞の作り方についての話聞き、「新聞作り」の基本について理解する。 「平和新聞」作りの構想を練る。
第2時	ピース愛知の調査・見学活動を行う	<ul style="list-style-type: none"> ピース愛知に見学に行き、新聞の記事となる資料を探す取材活動を行う。 調査・見学を通して、地域における戦争や平和の問題について考える。
第3時	「平和新聞」作りを行う	<ul style="list-style-type: none"> 地域における平和の問題を意識した新聞作りを進める。 活動の中で、相互発表・交流の時間を設け、わかりやすい新聞作りを行う。

以上のような計画にもとづき、2015年7月6日～14日まで（途中、休講・補講の振替も含む）の前期教職科目「社会」でのNIE実践に取り組んだ。

(2) 本実践の目標と評価観点

また、ピースあいちと連携したNIE実践について、表2のように目標と評価観点を設定し¹²、具体的な実践に取り組んだ。

まず第一に、市民性の育成の観点からの目標である。平和で民主的な国家及び社会の形成者として必要な市民性（シティズンシップ）として、社会の現実や課題に関心をもち、それらの事実を知るだけでなく、その背景を熟考し、より良い社会の実現に向かって判断して自分なりの意見をもち、それを表現することができる必要があるであろう。

第二に、情報読解力の育成の観点からの目標である。デジタルメディア時代の現代においても、社会の現実や課題に対する「思考力・判断力・表現力」が必要である。そのために、活字メディアとしての新聞についても、多角的に解釈・分析することができる「情報読解力」が求められるであろう。

第三に、学習の主体性の観点からの目標である。グループでの協同（協働）的な学習活動を通して、自主的・自発的に学ぶとともに、協力して学び合うことができるという点は、今後必要な資質となろう。

これらの目標と評価観点を学生に伝えることにより、教師の立場からの社会科授業づくりや教材研究の視点を同時に学ばせることができると考えた。

表2 教職科目「社会」におけるNIE実践の目標と評価観点

目標	評価観点
市民性の育成	<ul style="list-style-type: none"> 社会の現実や課題に関心をもち、それらの事実を知るだけでなく、その背景を熟考し、より良い社会の実現に向かって判断して自分也の意見をもち、それを表現することができる。
情報読解力	<ul style="list-style-type: none"> 社会の現実や課題に対して、複数の意見や考え方を尊重し、思考・判断・表現を行うことができる。 活字メディアとしての新聞を、多角的に解釈・分析することができる。
学習の主体性	<ul style="list-style-type: none"> 社会の現実とかかわり合いながら、適切な方法で情報を受信し、活用・発信することができる。 グループでの協同（協働）的な学習活動を通して、自主的・自発的に学ぶとともに、協力して活動することができる。

以下、活動風景の写真や、実際の新聞などを資料として用いながら、実践の概略について、報告していきたい。

5. 大学における地域の歴史遺産を活用したNIE実践の実際

(1) 「新聞作り」を学ぼう



写真4 新聞記事についてのスピーチ活動

第1時、7月6日(月)には、毎日新聞社で32年間記者を務め、政治部副部長、政治担当論説委員、編集総センター室長を歴任された経歴をもつ、榊直樹先生をゲストスピーカーとしてお招きし、「新聞作り」についてお話を聞く機会を得た。榊先生は、毎日新聞(2005年6月17日朝刊)の掲載記事「スクープ『原爆ルポ 60年ぶり発見』及び特集」を担当され編集された元新聞記者であったということである。

最初に、学生たちは、前時に課題として出された「1週間で興味をもった新聞記事」を持ち寄り、切り抜き記事を元にして一人ずつスピーチ活動を行った。スピーチの中身としては、「日進市長選 学生はどう見ている」「平成30年度以降に小中学校で道徳が教科化」「軍艦島が世界遺産に登録される」「アメリカとキューバが54年ぶりに国交回復」「戦後70年よみがえる経済維新～メニコンの創業者 田中恭一～」 「偽造身分証 名古屋の女子高生が捕まる」などといった記事が取り上げられた。これらのスピーチの題材からも、学生たちが、新聞記事の選定を通して、社会問題に関心を向けていった様子がわかる。

表3 「新聞作り」を学ぶ・授業記録の一部

教師の発問・指示・説明 (T)	学生の発言・学習活動 (S)
	S 僕が興味をもった記事は、7月4日土曜日の記事で「日進市長選 学生はどう見ている?」です。自分の地元が日進市で、昨日、市長選があったんだけど、日進市は交通に不便なので、市長が変わることによって、少ないバスの本数が増えると良いなと思いました。
T 自分たちがこうしてほしいということを、みんなで考えることができる。それも新聞の役割だね。	S 私が面白いと思った記事は、「うるう秒」の記事です。2015年7月日に、1秒足されました。なぜかというと、1秒は長いと思うからです。
T 新聞で調べたことに、興味をもつことは大切です。	S 僕が気になったのは、「平成30年度以降に小中学校で道徳が教科化される」という記事です。僕たちが小中学校の時は、なんとなくこなしてきた道徳の授業が、教科になるということは、大変なことだと思います。
T 道徳の問題は、人を殺していいということが、単純に議論できないということと同じだと思います。	S 僕は、日本の新しい世界遺産で、「軍艦島が世界遺産に登録される」という記事に興味をもちました。日本の近代化の裏には、朝鮮半島の人の犠牲があって、韓国側が非難していたことの両方を取り上げていることが気になりました。

- T 日本は産業遺産としての登録に積極的で、韓国は待てと言う、こういう両方の意見を示すことも新聞の役割ですね。
- S 僕の出身も、沖縄県の嘉手納基地の近くで、基地を作ることは、良いところも悪いところもあると思っています。
- S 僕は、「今月の20日に、アメリカとキューバが54年ぶりに国交回復」をするという記事に興味をもちました。また世界平和に近づくと思いました。
- T 今日平和のことに賢くなるね。(以下、冷戦の説明)

授業の中で、榊先生は、過去の「太平洋戦争開戦」「終戦」の新聞記事の縮刷版や、「パリの劇場で起こったテロ事件」「湯川さん、後藤さんがイスラム国に殺害される」などの最近の新聞記事を用いて、「実は新聞は、昔も今も、とても大事な問題を取り上げてきている」ということや、「いろいろなことを考えるのが重要で、それを伝えるツールの一つが新聞である」といった新聞の様々な役割と意義についての説明をされた。また、新聞作りに際し、「新聞はどういうものか、どうやったら新聞ができていくか、ということに興味をもって学習するということが非常に大事だ」という話をされた。

話を聞いた学生たちは、これまで情報の受け手としてしか捉えていなかった新聞の役割や意義について、情報を発信する側面からの価値や、その社会的性格について理解したようであった。

白井先生 「新聞作り」を学ぶ (2015年7月6日)

学長・榊直樹

1. 課題の提示 = 事前準備 (6月29日～7月6日)
 - 1) 新聞を毎日3頁以上読む。
 - 2) 「興味を持った記事」「新聞の作り方」などについて、気が付いたことを二つずつ書いてくる。
 - 3) 一週間読んだ中で、一番興味を持った記事を切り抜いて持ってくる。
 - 4) 記事について、面白いと思ったことを一人ずつ発表する。
2. 「新聞作り」を学ぶに当って = 意義の理解、進め方、導入の作業 (7月6日)
 - 1) 新聞とはどんなものか? (先ず先生が興味を抱かなければ、指導できない)
 - ① 新聞の役割とは? そもそもなぜ新聞が必要なのか。
 - ② どうしたら、読んでもらえるか?
 - 2) 記事に載せる材料 (記事と写真) を集める。
 - 3) 文章にまとめ、写真を選び、見出しを付け、レイアウトをする。
 - 4) 順序立てて進められるよう、イメージを示す。
 - ① レイアウトする (見出しの位置と大きさ、記事の分量、写真の大きさを決める = ニュースの大小、事柄の重要度の反映 → その意味は、自分がどんな新聞を作って、人に読んでもらいたいかが、何をアピールしたいかを考えること)
 - ② 取材内容を記事に書き、レイアウトで図った字数内に収める
 - ③ 写真を選び、トリミングを考える (どこを切り取ったら、インパクトがあるか)
 3. 「ピースあいち」へ行く前の事前準備 (7月6日～13日)
 - 1) 事前の準備が大切。関心や意識を高めて現場に行く姿勢を育てる
 - 2) なぜ、このテーマ (平和の問題) を選んで新聞を作るのか。
 - 3) 何を取材しようとするか、下調べをして、さらに想像してみる。
 4. 取材—新聞作りの材料集め = 個々の準備、姿勢、関心が試されるフィールドワーク (7月13日)
 - 1) 狙いを確認し、取材方法を徹底しておく。
 - ① 取材の目的、狙いを再確認しつつ、展示物を見る、館で尋ね、感想を考える。
 - ② 予想外に感動した事実や、衝撃を受けたことはないか。
 - 2) 必ずその場でメモをとる、写真をとる、インタビューする。
 5. 新聞の制作 = 成果を実際に「形」として表わす (7月20日)
 - 1) 見出しを考えながら、記事を書き、読み手を意識しながらレイアウトする。
 - 2) 見た人が「思わず読みたくなるか」「感動して忘れられない新聞だろうか」。

写真5 資料「新聞作り」を学ぶ

(2) ピースあいちで取材活動を行う



写真6 ピースあいちに取材に出かけよう

第2時、7月10日（金）には、ピースあいちにおいて、新聞作成のための取材活動を行った。現地では、ガイドボランティア代表の坂井さんのアドバイスをもとに、7～8名ずつのグループに分かれ、ガイドの方にお話を伺いながら取材活動を行った。展示や資料についての説明を聞きながらメモを取ったり、新聞記事に使えるような写真を撮ったりしながら見学・調査活動を行った。

初めて戦争資料の実物を目の当たりにした学生も多く、学生たちにとっては、衝撃的な体験となったようである。以下、見学・調査を行った学生による感想の一部をレポート1にまとめた。

初めて戦争資料の実物を目の当たりにした

レポート1 ピースあいちを見学・調査した学生による感想

今日は、ピースあいちに来て戦争についてたくさん学びました。例えば、戦争が起こることによって、大きい動物とかが殺されたり、小さい動物は軍の洋服などに使われたりしたと聞いた。戦争では、人間同士はもちろん、動物たちもこんなに傷ついていたんだなと思いました。海の戦場でも沢山船が沈まされて、その時、どの場所で沈まされたかがおおまかに書かれていたけれど、すごい記録だと思った。まだ、骨が見つかっていないと聞いて、早く見つかってほしいと思っています。あと、沖縄戦での防空壕では、外から朝鮮人、沖縄人、日本兵であったという話を聞いて、何か戦争になったら、誰も自分が大事だということが改めて実感されて、寂しくなりました。

今日、資料をいろいろ見て回って来て、自分は今まで沖縄戦についての話しかあまり聞いてこなかったけど、名古屋での戦争や、広島や長崎での戦争の話を開けたのでよかったです。

今日の体験を通して、戦争への関心が高まったので、戦争の話のビデオを見るなどして、勉強してみたいと思いました。

いろいろなことが衝撃的だった。戦争の話は、昔おじいちゃんから聞いたことがあったけど、今日、このピースあいちに来て、もっと知ることができた。目をそらしてしまいたい写真がたくさんあったけど、これが戦争なんだと実感させられた。今日、このピースあいちで聞いたこと、見たものは忘れずにいたいと思いました。今日は、本当に大事な時間になりました。

言葉でどれだけ戦争を知っているとと言っても、実際にどんなことがあったのかを、自分の目や耳を通して得る情報は、自分の中の戦争という知識をはるかに上回るものであった。「戦争は悲しいものだ」という言葉は、実際に戦争を経験した人だけが言うことができる言葉だと思いました。今の僕らにできること、それは戦争をもう二度と起こさないこと。今回、ピースあいちに来て、深く心に刻みました。

今回のピースあいちの見学は、大きく戦争について考えさせられるものでした。戦後数十年の間、戦争を一切行わなかったのは日本であり、その存在から、私は戦争というものを軽視し、戦争による死というものから目を背けていました。例えば、マンガやアニメなどによる戦争には、全く現実性がないものと思っていました。しかし、今回の見学を通して、本物の資料を見、少しでも「本物の戦争」に近づけたと思います。

戦争の悲しさを痛感した。今まで、「大変だ」「かわいそう」など、他人事としてとらえていて、戦争や平和の問題を、それほど大きな問題としては、考えていなかった。今回、お話を聞いたり資料を見て、正直、直視できない部分も多かったが、今、日本が平和で私たちが幸せに暮らしているのは、悲惨な戦争があったからだと思う。この戦争のことが、ずっと語り継がれ、忘れられることのないようにしたいと思った。

<p>戦争というのは、見方によって、多くの見方があるように思えました。各県でそれぞれの物語があり、知らないことが多くあった。人によっては、国同士のただの戦争としか知っていない人が多いと思うが、一つの戦争を細かく知るいい機会でした。もっとゆっくり話を聞きながら学びたいと思います。なので、機会があればまた来たいと思います。</p>
<p>今日は、自分の中で、戦争というものの見方が変わる大きなきっかけとなった。1階の100年間の世界の平和(戦争)への流れの揭示、軍船ではなく、戦時中の商船への被害、その組員(戦後)の方の体験を聞いたりすることができた。名古屋空襲、原爆など、目をそらしたくなるものも多くありました。私のどんな見方が変わったのかというと、兵隊だけが被害にあっているわけではないということです。よく聞く話では、兵隊の話しか聞きませんが、今日は戦時中の動物、民間人商船など、軍ではないものの被害状況も具体的に聞けたので、今の平和が、すべての犠牲の上で成り立っていることを実感しました。</p>
<p>戦争に関する生々しい資料を見させて頂き、戦争の激しさ、苦しみなどを感じることができた。テレビなどでは、名古屋の空襲が取り上げられることが少ないですが、ここでは、名古屋に重点を置いて資料が置かれているので、身近に感じることができた。民間の船なども戦争の犠牲になっていることも初めて知った。</p> <p>戦争で日本はいつも被害者の扱いだけど、その一方で、日本の他国での虐殺などの加害の歴史があることも忘れてはいけないと思う。日々忘れられていく記憶の中で、戦争のことだけは、決して忘れてはいけないと感じた。</p>
<p>今回、戦争について様々なお話を聞いたが、これは忘れてはいけない歴史であると、改めて感じた。昔に戦争をし、その上で今の平和が成り立っている。そこで犠牲になった人は、少なくはない。320万人という人が亡くなっている。ここで一番怖いのは、亡くなっていった人々の数字だけだということである。320万人一人ひとりに家族がおり、どこでどのように亡くなったのかを考えていないことである。そのため、海上で亡くなった人、戦場で亡くなった人について、調べて展示してあるのは、立派であると感じた。</p> <p>戦争の歴史というのは、誰もが目を背けていたいことである。しかし、忘れてはならないことであるため、私たち若い者が、それを受け継ぎ、次へつなげ、思考を止めないようにしないといけないと感じた。</p>
<p>戦争のことについて、今までの授業(世界史など)では、攻撃側の話しか視点を置いてなかったが、本日の見学により、戦争中には、昔から平和を訴える活動が繰り返されていることを知りました。戦争といえば、爆弾などを思い浮かべるのが今までの自分でしたが、そうした中でも平和を訴え続けた人の力がすごいと思いました。また、商船の沈没により、6万人の人が亡くなっていることは知らず、驚きました。その中で31%が、20歳未満という自分たちと同じ年の人たちが亡くなっていることは知らず、今まで以上に脳が苦しくなりました。本日の見学で得たことをもとに、良い新聞が作れるように頑張ります。</p>
<p>戦争についてすごい知識が増えた気になりました。館内は、3階に分かれていて、それぞれの階で平和について考えられる点良かったと思いました。1階では、戦争の歴史の流れがわかるように作られており、東山動物園の「ぞうれっしゃ」についての出来事が示されていました。2階では、名古屋空襲について示されており、写真や兵器を見たり、実際に触ったりすることができました。3階では、商船が襲われて死んだ状況なども記録されていて、そのデータがとてもよくわかりました。様々な場面で戦争について考えさせられました。</p> <p>やはり、戦争はあってはいけないことだと思いました。今日ガイドボランティアの方に聞いた話が本当なら、失うものが多すぎて、すごく複雑な気持ちになりました。貴重な体験ができてよかったです。</p>
<p>今日は、実際にいろいろな戦争についての出来事を学ぶことができました。実際の物などを見せてくれて、戦争のことについて改めて知ることができました。一番印象に残った話は、15年戦争の商船の話です。自分たちよりも年下の子が、外国にある日本の領土に物資を運んでいたことを聞いたときには、とても驚きました。</p> <p>今、日本では憲法9条が改正されようとしています。日本の歴史にも大きな変化がある中で、戦争のことは、本当に忘れてはいけないことだし、もっと日本や外国であったことをしっかり学ばないといけないと思いました。</p>

これら学生たちの感想からは、ピースあいちの見学活動が、戦争と平和の問題について考えを深める大きな契機となったことがわかる。名古屋大空襲、東山動物園の「ぞうれっしゃ」の展示に関する感想や、ピースあいちが特別展を行っていた太平洋戦争下における「民間商船」の犠牲者に関する感想が多く見られた。本物の戦争資料を目の当たりにし、ガイドの方からの話を真剣に聞きながら取材する姿からも、新聞作りに対しての意欲を高めた様子が伝わってきた。

(3) 「平和新聞」を作ろう

第3時、7月13日(月)には、取材したものを整理し、新聞にまとめていく作業を行った。作業の途中では、グループごとに意見交流を行い、どのようにしたらより良い新聞になるかを、第1時の榊先生から聞いた話と照らし合わせながら、新聞作りを行った。

学生の作成した新聞の一部が、写真7、8の資料である。

これらの平和新聞のように、地域の問題としての名古屋大空襲や、戦争下における子どもたちのこと、「ぞうれっしゃ」に代表される動物たちのことを扱った新聞が多く作成された。自分が学習したことと、教師となった時に伝えたいことが混在し、未だ未熟な視点も多いが、平和新聞作りを通して、彼らなりに地域における戦争と平和について、考えを深めた様子が分かる。



写真7 大学生が作成した平和新聞①

次のレポート2は、平和新聞を作成した学生による感想の一部である。

レポート2 平和新聞を作成して

<p>私はこの学習を通して、今の平和が当たり前なのは、先人たちの苦勞の賜物なのだと感じました。戦争経験者が減っていく中、今回のような機会を与えられ、少しでも興味をもった私たちは、進んで戦争に関する催しに参加し、たくさんお話を聞いてそれを伝え、風化させないことが重要だと思いました。</p> <p>また、今まで地上戦のことしか知らず、まだたくさんの位置や遺品が海の底にもぐっていることを初めて聞いて、驚きました。</p> <p>ピースあいちの見学を機に、自分でも進んで戦争について、勉強していこうと思いました。</p>
<p>今回、「戦争と平和」ということをテーマに新聞を書いてみたが、改めて、「戦争」というものを考えるきっかけとなった。日本という国は、辛く、悲惨な過去をもつ国の一つであることを実感した。その上に、今の平和が成り立っているのだと思った。私自身も、また、ほとんどの人が、戦争を知らないのが現実である。戦争は、絶対に忘れてはいけないことだと思うし、戦争のことを知っておくべきである。</p>
<p>勝ち負けに関わらず、多くの犠牲者、多くの人々の悲しみを生む戦争、自由さえも奪われる戦争を二度としてはいけない。新聞の作成を通して、私はそう考えました。</p> <p>私はこの新聞を作成して、読んでもらった人に、命の大切さ、戦争は勝ったから全員が幸せであるということではないということを知ってもらいたいと思い、新聞を書き終えました。</p>
<p>私たちはこの事実を受け止めないといけないと思う。この事実をこの先の未来につなげていかねばならない。それが自分たちの使命であると、私は思う。</p> <p>ピースあいちで見たことは、昔の現実を見せられた気になった。今後、子どもたちを連れて、ぜひ行ってみたいと思った。</p>
<p>第二次世界大戦で愛知県が受けた被害を全然知らず、多くの人々が犠牲になったという事実を知り、大変心が痛くなりました。今回のピースあいちの見学や新聞づくりのような体験は、これから先あるか分からないものなので、とても貴重なものでした。これから生きていく上で、忘れてはならないものが新たにできたと思います。次は、僕たちのような若い世代が次に伝えていかないとと思いました</p>

これらの学生たちの感想からは、実践の中で新聞を活用して表現する機会を設定したことが、戦争や平和に対する考えを深める契機となったということが指摘できる。教師になった際には、ピースあいちで見たり、聞いたりしたことを、同じように子どもたちに体験させたいという感想もあった。新聞づくりを体験させたことにより、彼らを情報を発信する側からの視野に立たせたと捉えることができる。

6. おわりに

本稿のまとめとして、以下の3点が、実践の成果としてあげられる。

第1に、地域の歴史遺産を活用したことにより、学生たちが、関心をもちながら地域の歴史について考えることができた点である。名古屋大空襲や戦時下の子どもたち、東山動物園の「ぞうれっしゃ」など、学生なりの目線で地域における戦争や平和の問題について考えていった。大学における地域の歴史遺産の活用は、学習者の主体性形成の上でも有効であったと捉えることができる。

第2に、ピースあいちへの調査・見学活動を通じて、学生たちが、地域の歴史を具体的に学ぶ

ことができた点である。地域に残る本物の歴史資料を目の当たりにして、学生たちは、地域における戦争や平和の問題を、具体的に解釈し思考していったのである。NIEを通じた調査・見学活動を伴う歴史的な体験活動は、情報読解力の育成という観点からしても、重要な意義を認めることができる。

第3に、壁新聞づくりという手法により、戦争や平和の問題について学生たちが、表現活動や対話を通して考えを深め広げていった点である。スピーチ活動やグループ活動の場面でも、自分なりの考えを表現できる学生が増えていった。そのような情報を発信する力は、地域社会に生きる市民として、必要な資質であるといえる。

以上の点を踏まえ、地域と連携した有効な社会科教員養成のあり方を検討していくことが、引き続き今後の課題である。

【注】

- 1 真島聖子（2010）：「判決書教材を活用した人権教育—大学における授業実践を中心に—」『愛知教育大学教育実践総合センター紀要』第13号。真島聖子・梅野正信（2013）：「社会的課題と学校を結ぶ社会科・公民科指導法の開発研究—教職科目としての内容・方法の改善に焦点を当てて—」『日本教育大学協会年報』第31号。
- 2 岡田了祐・草原和博（2013）：「教員志望学生にみる社会科授業分析力の向上とその効果—社会系（地理歴史）教科指導法の受講生を手がかりに—」『広島大学大学院教育学研究科紀要 第二部（文化教育開発関連領域）』第62号。岡田了祐・草原和博（2014）：「教員志望学生にみる社会科カリキュラム分析力の構造とその効果—社会系（地理歴史）カリキュラムデザイン論の受講生を手がかりに—」『広島大学大学院教育学研究科紀要 第二部（文化教育開発関連領域）』第63号。
- 3 外池智（2010）：「社会科教員養成におけるフィールドワークと関連した授業実践の実際—「社会科巡検」と「社会科授業づくり演習」を事例として—」『秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要』第32巻。
- 4 東邦学園九十年誌編集委員会編（2014）：『東邦学園九十年誌』学校法人 東邦学園、73頁。
- 5 戦争と平和の資料館 ピースあいちのHP <http://www.peace-aichi.com/introduction.html> より
- 6 寺本潔・山田修三編著（2003）：『近代の歴史遺産を活かした小学校社会科授業』明治図書
- 7 寺本潔（2007）：『社会科におけるフィールドワーク指導技術育成プログラムの研究 研究成果報告書』（文部科学省初等中等教育局「わかる授業実現のための教員の教科指導力向上プロジェクト」平成18年度経費）。なお、かつて筆者も、社会科教師の専門性形成に考古学を活用した取り組みについて報告したことがある（白井克尚（2013）：「社会科教師の専門性形成に「考古学」を活かす—愛知県埋蔵文化財調査センターとの連携を通して—」『愛知教育大学社会科教育学会 探究』第24号を参照）。
- 8 白井克尚（2014）：「情報読解力を育てるNIE学習」『社会科教育』No.663、明治図書、7頁。
- 9 小原友行（2011）：「デジタルメディア時代の新聞活用教育」日本教育方法学会編『デジタルメディア時代の教育方法』、113～125頁。
- 10 日本NIE実践学会編（2008）：『情報読解力を育てるNIEハンドブック』明治図書。市川正孝（2013）：『「新聞教育」を創る—授業づくりの方法と可能性—』学文社。日本NIE研究会（2015）：『新聞で育む、つなぐ』東洋館出版社等を参照。
- 11 「まとめ型新聞」小原友行・高木まさき・平石隆敏編著（2013）：『学校教育と新聞活用—考え方から実践方法までの基礎知識—』ミネルヴァ書房、182～183頁で紹介されている。
- 12 小原友行（2013）：「デジタルメディア時代における「NIE」の今日的意義」『日本NIE学会第10回愛知大会発表要旨集録』、9頁を参考にして作成した。

受理日 平成28年3月15日